

発行所
北海道新聞社
〒060-8711 札幌市
中央区大通西3丁目6
電話011-221-2111
dd.hokkaido-np.co.jp
読者センター
011-210-5888
(日曜・祝日除く9時~18時)
ご購入申し込み
0120-464-104
ヨムヨム ドーシン

遺品整理士という仕事

木村 榮治著



評 北室かず子

ライター

ひと昔前の遺品整理には、故人の思い出を語り合いながらしみじみと行う形見分けのイメージがあった。しかし今や、離れて暮らす亡親が残した膨大な品々の分別、清掃、搬出に頭を抱えている人も多いのではないか。ゴミとして処分せざるを得ないものを選別する精神的負担も大きい。評者も遠距離介護の果てに母の死を迎えたが、七回忌を過ぎても遺品整理ができないでいる。

本書はそれをビジネスで行う話である。著者は北星学園大学社会福祉

悲しむ遺族の心守るとりで

学部を卒業、日本で初めての精神障害者やひきこもりのためのインターネットシステム創設に携わった後、2011年に一般社団法人遺品整理士認定協会(千歳)を立ち上げた。きっかけは、著者自身が亡父の遺品整理を便利屋さんに依頼した経験から。あざやかな手際で明るくテキパキと仕事をこなす便利屋さんに落ち度はなかったが、著者はそのさば

けた仕事ぶりゆえに「父の尊厳が失われた」と感じてしまう。高額請求などに悩む人の存在も知り、心のケアに配慮した信頼できるプロフェッショナルの必要性を痛感する。

孤独死に直面し強烈な後悔で苦しむ遺族、自力整理に頓挫して遺品を重荷にしか感じられなくなっている遺族。著者は「その感覚にストップをかけなければならない」という。印鑑や権利証書探しに遺品整理士が見せるワザ、業者選定のポイントなど、プロならではの極意が次々と明

かされるうち、赤の他人に遺品を託す抵抗感が消えていくのを感じた。それどころか、遺品整理は、からまった糸を解きほぐして故人を生き返らせる行為だと思えてきた。

少子超高齢社会の今、近しい親族と支え合いながら死を乗り越えられる人は少数派だ。遺品整理士は、そんな現代の生と死の間で、遺族の心を守るとりである。

(平凡社新書 821円)

絵・あべひろみ

本の森

